

「北海道大学文学部人骨事件」からみる遺骨返還問題 —植民地主義と学術研究—

The Discussion about the Problem on the Return of Ashes through
“The Human Bone Incident in Faculty of Letters, Hokkaido University”:
Colonialism and Academic Research

土 取 俊 輝
Toshiki TSUCHITORI

要旨

本稿は北海道大学文学部人骨事件を事例とし、先住民をはじめとする遺骨返還問題で何が問題とされているのかについて論じるものである。北海道大学文学部人骨事件とは、1995年に北海道大学文学部の古河講堂内の一室から、人間の頭骨6体が入ったダンボール箱が発見された事件である。発見された遺骨のうち返還されたものは、韓国東学党のものとされる頭骨1体と、北方先住民のウィルタのものとされる頭骨3体である。あとの2体は返還先を探す事が出来ず、現在は寺院に仮安置されている。これらの人骨が北海道大学に保管されていた背景には、北海道大学が植民地主義やダーウィニズムに基づいた北方先住民の人骨の収集、研究の拠点であったことが関係している。

北海道大学文学部人骨事件を事例として遺骨返還問題を見てみると、研究機関と植民地主義との密接な関係が浮き彫りとなった。また、その植民地主義の負の遺産であるところの遺骨問題に対して、研究機関が真剣に向き合って対応していないことも、先住民の側から問題として焦点化されている。人権意識の高まった現代において、研究機関や我々研究者は、学術研究と植民地主義との関係という過去に向き合った上で、遺骨返還問題に対して取り組んでいくことが求められている。

キーワード：先住民、遺骨、植民地主義、人権

はじめに

近年、アイヌ民族を取り巻く状況が変化の兆しを見せている。2019年3月現在、日本政府は国会でアイヌ民族に関する新たな法案の成立を目指しており、その法案の中でアイヌを日本の先住民族であると初めて明記し、その文化の継承を国と自治体の責務であると位置づけようとしている¹⁾。また、2009年に開かれた「アイヌ政策のあり方に関する有識者懇談会」での提言

1) 読売新聞オンライン「アイヌ新法案 歴史と文化への理解深めたい」2019年3月25日、URL: <https://www.yomiuri.co.jp/editorial/20190324-OYT1T50187/> (2019年3月30日閲覧)。

を元に、「民族共生の象徴となる空間」設立の検討が開始、その核となるものとして、日本で5番目の国立博物館となる国立アイヌ民族博物館が、2020年に開設される予定となっている〔中川 2018: 30〕。

このようにアイヌを先住民として明示していく動きが見られる一方で、いまだ残された問題も多数存在している。研究機関が保管しているアイヌの遺骨返還も、その一つである。研究機関を相手取った遺骨返還の裁判が次々に行われ、遺骨を巡る研究機関の対応を批判、糾弾したり、問題点を指摘する著作も複数出版されている²⁾。遺骨返還では、どのようなことが問題とされているのだろうか。

本論は、1995年に発生した北海道大学文学部人骨事件を事例とし、遺骨返還問題で焦点化されるいくつかの問題を論じるものである。北海道大学文学部人骨事件については、北海道大学が組織した人骨問題調査委員会が3度にわたって報告書を出しており、事件の経過や背景、遺骨の返還に至るプロセスが詳細に述べられている。また、北海道大学の報告書に対する批判とそれに対する応答の資料もあることから、北海道大学文学部人骨事件を事例とすることで、遺骨返還問題でコンフリクトが発生している部分を焦点化しやすいと考えられる。本稿では、北海道大学文学部人骨事件の背景と詳細を述べた上で、北海道大学文学部人骨事件が示す、遺骨返還問題の争点を明らかにしていく。

1. 北方先住民の遺骨の盗骨と北海道大学

北海道大学文学部人骨事件は、大学構内の部屋から北方先住民などの人骨が発見されたというものである（詳細は後述）が、なぜ大学構内に人骨が持ち込まれるに至ったのだろうか。現在、遺骨だけでなく、先住民の文化遺産の多くが、主要な先進国の博物館や大学に収蔵、保管されており、それらに対して先住民が返還運動を起こしている〔加藤 2018: 1〕。加藤（2018）によれば、それらの先住民の文化遺産が収蔵、保管されるに至った経緯としては、①15世紀以降の大航海時代と植民地主義の影響下において収集された、所謂「珍品としての収集品」と、②18世紀以降の人種主義や植民地主義の下で人骨研究のために収集された人類学コレクションと、異文化研究のために収集された民族学コレクションの2つがある〔加藤 2018: 1〕。

研究機関に収蔵、保管されている遺骨の経緯については、その多くが②の流れに当てはまる。②の流れについて詳しく述べると、18世紀以降に博物学が発達し、人類に対しても収集、分類を行うようになっていく中で、肌の色で人類を分類するというような、人種主義に基づく研究が展開されていくようになる〔加藤 2018: 1-2〕。そこに、植民地主義や19世紀になるとダーウィニズムがイデオロギーとして加わるようになり、植民地で人骨を採集し、それを測定して人種の違いや種族の類型、そして種族の優劣を特定、判断するようになった〔加藤 2018: 1-2; 小田 2018: 77〕。このような流れの中で、日本においても先住民への盗骨が行われていったのである。

2) 例えば、北大開示文書研究会（編）（2016）、土橋（2017）、松島・木村（編）（2019）など。

北海道大学と関係の深い、北方先住民の盗骨に関していうと、アイヌの遺骨をはじめて大量に収集した日本人は、帝国大学医科大学（現在の東京大学医学部）の解剖学教授であった、小金井良精であるとされる³⁾ [植木 2019: 94]。ドイツへ留学し、ベルリン大学で解剖学を修めた小金井は、その学問的関心を細胞から骨、とりわけ頭骨へと移していった [植木 2017: 35、41]。小金井は1888年（坪井正五郎が同行）と1889年（小金井の妻である喜美子が同行）に北海道へ旅行し、頭骨の収集に当たった [植木 2017: 46-62]。すなわち、アイヌの墓を無断で暴いて、遺骨を持ち出したのである。小金井の盗骨以前から（当時も）、墓の発掘は犯罪であった。幕末の1865年には、イギリス人が箱館（現在の函館）でアイヌの墓を掘り返し、骨を盗んでいるが、日本側はこの行為を一貫して犯罪として扱い、日英間で外交問題となっている [植木 2017: 6-27]。れっきとした犯罪であるにも関わらず、小金井はアイヌの骨を盗掘したのである。今日的な価値観からすれば、ここには学術的価値の前には世俗の法を無視する、学者としてのおごりも見取れる。2度の北海道旅行の後に発表した論文で、小金井は166のアイヌの頭骨を研究資料として用いたが、その大半が2度の北海道旅行で得たものであるという [植木 2017: 62]。

小金井の後に、頭骨の測定を大々的に実行したのは、京都帝国大学の教授であった、清野謙次である [植木 2019: 97]。日本人の起源を明らかにするためには、日本人に隣接している人種の研究を行わなければならないという理由から、1924年に清野はアイヌの頭骨収集のための旅行に出かけた [植木 2017: 73]。清野は当時日本領だったサハリン（樺太）に渡ってアイヌの頭骨を収集したが、その数は清野が発掘記に記したもののだけで52にも及ぶ [植木 2017: 73-75]。

昭和に入ると、アイヌ墓地の発掘はさらに大規模なものとなった。1932年に財団法人日本学術振興会が設立され、そのうちの第八小委員会が、1934年から『アイヌ』の医学的民族生物学的調査研究を開始した。このプロジェクトの「解剖学部」部門に参加していたのが、北海道帝国大学医学部の山崎春雄と児玉作左衛門である [植木 2019: 97]。山崎春雄は1931年に浦河郡で、1933年には沙流郡で、1934年には旭川市でアイヌ墓地を発掘しており、このうち1931年の浦河郡での発掘は、北海道大学医学部のアイヌ墓地発掘の嚆矢であった [国立大学法人北海道大学 2013: 15]。児玉作左衛門は大量のアイヌ人骨を発掘しており、その数は500を超える [植木 2017: 115-116]。

北海道大学医学部では、山崎や児玉の他にも、伊藤昌一、岡田正夫、松野正彦らがアイヌ墓地の発掘を行っており、第二次世界大戦後の1972年まで発掘が行われていたことが判明している [国立大学法人北海道大学 2013: 113-114]。2016年に文部科学省が行った、大学等におけるアイヌの人々の遺骨の保管状況の再調査によれば、北海道大学に保管されている遺骨は、個体ごとに特定できたものが1015体（そのうち個人が特定できたのは34体）、個体ごとに特定できなかったものが367箱存在している [文部科学省 2017: 2]。アイヌの遺骨を保管している

3) 小金井は森鷗外の妹喜美子と結婚しており、孫にはショートショートの第一人者として著名な小説家の星新一がいる [植木 2019: 96]。なお、星は『祖父・小金井良精の記』 [星 1974] という小金井の伝記も執筆している。

大学は 12 あるが、その数は北海道大学が突出して多い（表 1 参照）。北海道大学は、日本における北方先住民の人骨の収集、研究の拠点であったのである。

表 1：各大学に保管されているアイヌの遺骨数〔文部科学省 2017：1-2〕

大学名	個体ごとに特定できた遺骨 (個人が特定できた遺骨)	個体ごとに特定できなかった遺骨 ※箱の大きさは各大学によって異なる
北海道大学	1015 体（34 体）	367 箱
東北大学	20 体	1 箱
東京大学	201 体	6 箱
新潟大学	16 体	2 箱
京都大学	87 体	
大阪大学	32 体	1 箱
札幌医科大学	294 体（4 体）	
大阪市立大学	1 体	
南山大学	1 体	
天理大学		5 箱
岡山理科大学	1 体	
東京医科歯科大学	8 体	
計 12 大学	計 1676 体（計 38 体）	計 382 箱

北海道大学にある多数の遺骨について、返還請求が行われるようになったのは近年になってからである。1980 年に市民団体「北海道・民族問題研究会」の代表であった海馬沢博が、北海道大学にアイヌの遺骨の保管状況について問い合わせているが、北海道大学側は個々の研究者の研究内容には関与できないという回答をしている〔市川・平田 2016：168-169；植木 2019：98-99〕。その後、1982 年に北海道ウタリ協会（現在は北海道アイヌ協会）が北海道大学に遺骨の返還を求めるが、このときも北海道大学側は研究用に保管を続けたいと主張、最終的に、1984 年に 35 体の遺骨が北海道ウタリ協会の一部の地方支部に返還され、残った 1000 体以上の遺骨が医学部の駐車場内に建設されたアイヌ納骨堂に搬入されることとなった〔市川・平田 2016：171；植木 2019：99〕。

その後、1995 年に北海道大学文学部人骨事件が発生するが、アイヌ納骨堂の遺骨の返還が進展するのは、2000 年代に入ってからのものであった。2008 年にアイヌ民族の小川隆吉が城野口ユリとともに遺骨に関する情報の公開と返還を北海道大学に求めた。しかし、北海道大学側は拒否したため、小川と城野口はもう一人のアイヌと共に、2012 年に遺骨の返還を求める裁判を起こした〔植木 2019：99-100〕。この裁判は 2016 年に和解が成立し、遺骨が返還されたが、この裁判を契機として、遺骨返還の裁判が次々と行われるようになった〔植木 2019：102-104〕。2018 年には、札幌医科大学に遺骨の返還が求められ、北海道大学以外の大学では初めてとなる返還請求の裁判が行われることとなった〔植木 2019：92、104〕。

2. 北海道大学文学部人骨事件について

北海道大学文学部人骨事件とは、1995年に北海道大学文学部の古河講堂内の一室から、人間の頭骨6体が入ったダンボール箱が発見された事件である。これらの頭骨は新聞紙に包まれており、棚の中に放置されていた。6体の人骨の内訳は、「韓国東学党」と墨書きされたものが1体、「オタスの杜・風葬オロッコ」と書かれた貼り紙がされていたものが3体、「日本男子20才」と書かれた貼り紙がされていたものが1体、「寄贈頭骨出土地不明」と書かれた貼り紙がされていたものが1体であった〔北海道大学文学部古河講堂「旧標本庫」人骨問題調査委員会（編）1997：1〕。

これらの頭骨が発見されるに至った経緯は、北海道大学文学部古河講堂「旧標本庫」人骨問題調査委員会（編）（1997）によれば以下の通りである。北海道大学文学部元教授の吉崎昌一が1995年3月に退官した後、部屋のスペースを確保するために、吉崎が「標本庫」として使用していた古河講堂8番室（後に101号室へと改名される）を足立明助教授や井上昭洋助手、大学院学生、学部学生、研究生、吉崎の研究室に出入りしていたアイヌ民族の男性が掃除していたところ、棚の中に「人骨」と記入されているダンボールがあることに気づいた。中を改めてみると、前述したような頭骨が6体、新聞紙にくるまれて収められていた。足立が考古学の林謙作教授に連絡を取り、観察を行ってもらったところ、いずれも古人骨ではないことが確認された。そこで足立は頭骨をダンボール箱に入れたままにし、翌日改めてその由来を検討することに決めた。しかしその翌日の朝、作業に参加していたアイヌ民族の男性が頭骨を供養するためにダンボール箱を持ち出すということが起こった。頭骨の発見が今西順吉文学部長に報告され、足立ら関係者から事情を聴取した後、「古川講堂『旧標本庫』人骨問題調査委員会」を設置し、問題の究明にあたることとなった。

その後、「アイヌ・モシリの自治区を取り戻す会」の代表である山本一昭ほか数名が、この北海道大学大学院文学研究科・文学部古河講堂「旧標本庫」人骨問題に対して抗議をしに文学部を訪れた際に、アイヌ民族の男性によって持ち出された頭骨が、山本の元にあることが判明する。山本がラジオ番組で語ったところによれば、頭骨を持ち出したアイヌ民族の男性から話を聞いた山本が、自身のもとに頭骨を持って来るよう要請し、それらが本物であると思われたためアイヌ民族方式のカムイノミを行ったのだという。話し合いの末、山本から文学部に頭骨は一旦返却されることとなった〔北海道大学文学部古河講堂「旧標本庫」人骨問題調査委員会（編）1997：4-7〕。

これら6体の頭骨が古川講堂の「標本庫」にあった理由について、保管場所の責任者であった吉崎は、調査委員会が行った事情聴取で、当初は前任者である名取武光助教授から引き継いだものである可能性が高い、自身も引き継いだものを全てチェック出来ておらず、頭骨の存在については知らなかったと述べていた。しかし、その後証言を変化させ、1969年に大学封鎖のバリケードが解除された後、箱を開けて、その中に複数の頭骨があることを確認したが、研究対象としては関心がない新しい頭骨であったため、そのままにしておいたと証言している〔北海道大学文学部古河講堂「旧標本庫」人骨問題調査委員会（編）1997：8-9〕。

6体の頭骨が北海道大学に返却された後、それぞれの頭骨について調査が行われ、返還や供養が行われることとなった。まず、「韓国東学党」と墨書きされた頭骨についてみていく。この頭骨には書付が添付されていた。それは、以下のような内容である。

髑髏（明治三十九年九月二十日珍島ニ於テ）

右ハ明治二十七年韓国東学党蜂起
スルアリ全羅南道珍島ハ彼レカ最モ猖獗ヲ
極メタル所ナリシカ之レカ平定ニ帰スルニ際シ
其首唱者数百名ヲ殺シ死屍道ニ横
ハルニ至リ首魁者ハ之ヲ梟ニセルカ右ハ其一ナリ
シカ該島視察ニ際シ採集セルモノナリ

佐藤政次郎

〔北海道大学文学部古河講堂「旧標本庫」人骨問題調査委員会（編） 1997：13〕

また、頭骨自体にも、「韓国東学党首魁ノ首級ナリト云フ 佐藤政次郎氏ヨリ」〔北海道大学文学部古河講堂「旧標本庫」人骨問題調査委員会（編） 1997：14〕という墨書が記されている。この書付と墨書の内容から、この頭骨が1894年の韓国東学党蜂起事件、すなわち東学農民戦争（甲午農民戦争）の関係者ないし、中心人物のものであると考えられる〔北海道大学文学部古河講堂「旧標本庫」人骨問題調査委員会（編） 1997：14〕。また、その頭骨が明治39年（1906年）9月20日に採集されたということが分かる。

書付と墨書の双方に記されている佐藤政次郎については、以下の議論がある。書付にある日付の1906年9月20日に韓国南部の全羅南道に居た可能性のある佐藤政次郎は、①韓国統監府勸業模範場の技手、②全羅北道群山の地主、③私立上野女学校の教諭の3人である〔北海道大学文学部古河講堂「旧標本庫」人骨問題調査委員会（編） 1997：17-18〕。北海道大学文学部古河講堂「旧標本庫」人骨問題調査委員会（編）（1997）によれば、この3人のうちで、頭骨採集を行った可能性の高い人物は、①韓国統監府勸業模範場の技手であった佐藤政次郎である。その理由としては、①の佐藤政次郎が関わった棉作事業の採種圃が東学農民軍の死体が捨てられたと口伝される場所の近くにあったこと、書付にある頭骨を採集した日に、①の佐藤政次郎の勤務地から技師または技手が棉採種圃を仕事で訪れていること、頭骨に添付されている書付と①の佐藤政次郎の筆跡がかなり類似していること⁴⁾、①の佐藤政次郎が札幌農学校出身であり、私財を北海道大学へ寄付するという遺言を残すなど北海道大学とのつながりが強かったことなどがあげられる〔北海道大学文学部古河講堂「旧標本庫」人骨問題調査委員会（編） 1997：

4) ただし、書付に見られる筆跡全てが相当に類似しているわけではなく、書付の欄外に記されている署名は①の佐藤政次郎の筆跡とは一致していない。しかし、この書付の署名は後筆である可能性もあり、この署名の不一致だけで、書付を書いた佐藤政次郎が①の佐藤政次郎でないことを証明することはできない〔北海道大学文学部古河講堂「旧標本庫」人骨問題調査委員会（編） 1997：41-42〕。

27-42]。②と③の佐藤政次郎については、①の佐藤政次郎ほど頭骨との強い関連を示す情報は見られない。このことから、消去法ではあるが、①の佐藤政次郎が頭骨を採集した可能性は高いと考えられる〔北海道大学文学部古河講堂「旧標本庫」人骨問題調査委員会（編） 1997：53-55〕。

佐藤政次郎は、韓国・朝鮮に渡った後も、札幌農学校校長であった佐藤昌介と連絡を取っており、親交が続いていた。佐藤昌介と新渡戸稲造の間にもつながりがあり、新渡戸は札幌農学校の卒業生を植民地に送り込むために、佐藤昌介に積極的に連絡をとっていたという〔北海道大学文学部古河講堂「旧標本庫」人骨問題調査委員会（編） 1997：146〕。新渡戸と佐藤昌介は札幌農学校で植民学の講義を受け持っており、2人とも、当時は急進的な積極植民策を提唱していた。新渡戸は1906年に韓国を訪問し、佐藤政次郎の勤務先がある場所にも赴いている。また、韓国訪問時の新渡戸の業務には韓国における棉作の視察が入っていた。これらのことから、北海道大学文学部古河講堂「旧標本庫」人骨問題調査委員会（編）（1997）は、1906年に佐藤政次郎と新渡戸稲造が面会した可能性が高く、頭骨が札幌農学校に持ち込まれたのは、佐藤政次郎と新渡戸稲造、佐藤昌介らの札幌農学校のつながりが関係しているのではないかと推測している〔北海道大学文学部古河講堂「旧標本庫」人骨問題調査委員会（編） 1997：111-152〕。

北海道大学文学部古河講堂「旧標本庫」人骨問題調査委員会は当初から、調査によって頭骨の関係者が判明すれば、その関係者に返還することを基本方針としていたという〔北海道大学文学部古河講堂「旧標本庫」人骨問題調査委員会（編） 1997：186〕。この「韓国東学党」と墨書きされた頭骨は、1996年5月、東学農民革命記念事業会、東学農民革命遺族会、東学の後進である天道教東学民族統一会という、頭骨に関係している3団体が遺骨奉還のために結成した、東学農民革命軍指導者遺骸奉還委員会に返還された〔北海道大学文学部古河講堂「旧標本庫」人骨問題調査委員会（編） 1997：186-187〕。返還の際には、東学農民革命軍指導者遺骸奉還委員会の強い希望により、共同奉還という形がとられている。

次に、「オタスの杜・風葬オロッコ」と書かれた貼り紙がされていた頭骨についてみていく。この頭骨に貼られていた付箋の文字はマジックインキのようなもので書かれていたことから、「オタスの杜（詳細は後述）」が存在した1926年～1945年の間にはこの付箋は貼られていなかったと考えられている〔北海道大学文学部古河講堂「旧標本庫」人骨問題調査委員会（編）2004：154〕。3つの頭骨を解剖学的、形質人類学的に分析したところ、それぞれオロッコと同じモンゴロイドの男性のものと、モンゴロイドの女性のもの、そしてオロッコとは異なるコーカソイドの男性のものであることが分かっている〔北海道大学文学部古河講堂「旧標本庫」人骨問題調査委員会（編） 2004：154、171-172〕。

オロッコ（オロチョンと呼ばれることもあった）とは、サハリン（樺太）の先住民族にして少数民族である〔榎澤・弦巻 2012：82；田中・ゲンダーヌ 1978：52〕。オロッコは他民族（樺太アイヌや和人など）からの呼び名（他称）であり、オロッコ自身は、自分たちのことをウィルタという民族名で呼んでいた（自称）。オロッコという呼称は蔑称であると見なされることもあるため、現在ではウィルタと呼ばれることが一般的である〔榎澤・弦巻 2012：82、88-

89]。ウィルタは「飼いトナカイ（Ulaa）と共に生活する人」という意味で、遊牧を中心に狩猟や漁撈を行っている〔榎澤・弦巻 2012：82〕。ウィルタは元々、①戦争（争い）を知らないこと、②階級を知らないこと、③「私有」の概念を持たないこと、④文字を持たないことを特徴として持つ民族であったという〔榎澤・弦巻 2012：82〕。

ウィルタはタライカ地方に住んでいたが、1905年（明治38年）にサハリンの南半部分を日本が領有するようになると、1926年（昭和元年）にはポロナISK（敷香）に北方少数民族に対する保護施設が作られ、そこに強制的に住まわせられるようになった〔榎澤・弦巻 2012：82；田中・ゲンダーヌ 1978：11-12〕。このポロナISKの強制保護施設が、「オタスの杜」である。この「オタスの杜」にはウィルタ以外にも、ニブヒ、サンダー、キーリン、ヤクトなどといった北方少数民族が生活させられていた。このことから、「土人の都、オタスの杜」として宣伝され、観光名所の一つであるとされていた〔榎澤・弦巻 2012：82；田中・ゲンダーヌ 1978：11-12〕。

この「オタスの杜」には1930年に「土人」教育所が設立され、北方少数民族の日本人化教育が行われた〔榎澤・弦巻 2012：109〕。その後、太平洋戦争が激化していた1942年に、ウィルタの身体能力の高さに目を付けた日本の特務機関は、彼らを対ソ連用のスパイとして徴用し活動させた。それ以外の人々も、憲兵隊、女子挺身隊、トナカイ部隊として徴用された〔榎澤・弦巻 2012：82〕。しかし1945年にソ連が対日参戦すると、サハリンにも戦火の渦が及ぶようになる。さらに終戦後には、ウィルタなどの北方少数民族は、スパイなどで日本軍に協力したとされ、戦犯者としてシベリアへ送られてしまった⁵⁾〔榎澤・弦巻 2012：82〕。ポロナISKには、多くの女性や子供たちが残されたが、彼ら彼女らも日本軍に協力したスパイの家族とみなされ白眼視されて、自らの文化や言語を表立って使用することが出来なくなり、孤立化、内面化が進行していくこととなった〔榎澤・弦巻 2012：82〕。

ウィルタは戦時中日本軍に協力したとしてソ連国内で冷遇され、共産党による粛清、貧困などもあったことから、日本に移住することを選ぶウィルタもいた。しかし、日本国内においても、ウィルタはソ連同様、「よそ者」としての扱いを受けることとなった。例えば、ウィルタのダーヒンニェニ・ゲンダーヌ（日本名は北川源太郎）は、スパイの罪で9年6ヶ月の刑を受けシベリアに送られた後、日本に帰国するが、召集令状を受けて従軍したにも関わらず、軍人恩給の受け取りが却下されてしまった〔榎澤・弦巻 2012：110-111；田中・ゲンダーヌ 1978〕。軍人恩給受け取りが却下された理由は、戦前の北方少数民族は日本語の名前に改名させられておきながら戸籍は与えられておらず、戸籍のないものに送られた召集令状は正式なものではないからだというものであった〔榎澤・弦巻 2012：111；田中・ゲンダーヌ 1978：202-204〕。また、ウィルタであるということが分かると、離婚されるなどの差別を受けることがあり、それを恐れてウィルタであることを隠して生きる人が多かった〔田中・ゲンダーヌ 1978：157-

5) シベリアへ送られた北方少数民族の戦犯者は、ウィルタ31名（うち16名が抑留中に死亡）、ニブヒ16名（うち9名が抑留中に死亡）、サンダー2名であったが、これは少数民族の総人口の1割以上にあたり、戸数の半分から戦犯とされた人を出したことになる〔榎澤・弦巻 2012：82〕。また、シベリアから帰還した人の大多数も何らかの障害を負うなど、壮絶な状況であった〔榎澤・弦巻 2012：82〕。

166]。自身がウィルタであると表立って名乗っていたのは、ダーヒンニェニ・ゲンダーヌとその妹の北川アイ子だけであった[榎澤・弦巻 2012: 84]。ゲンダーヌは1987年に死去し、北川も2007年に死去したため、現在表立ってウィルタであることを公表している人物は存在しないという[榎澤・弦巻 2012: 84-86]。ウィルタはソ連と日本という2つの国から冷遇され、差別されたのである。現在、ウィルタの多くはロシアのサハリン州に住んでいるとされ、その総数は約300人ほどであるとされる[榎澤・弦巻 2012: 82]。

「オタスの杜・風葬オロッコ」と書かれた貼りがされていた頭骨の返還について、北海道大学は1996年に日本のウィルタ協会とサハリンのポロナISK地区少数民族委員会と連絡をとっている。この時点では、戦後に日本とソ連から不誠実な扱いを受けた歴史の影響や、遺骨の返還には様々な困難（誰の遺骨か不明なので墓守をするべき人が不明、ロシア当局から誰のものか不明な遺骨を墓地に埋葬する許可を取り付けるのが困難、遺骨が呪力を持ったサマ（シャーマン）のものである可能性があるなど）があることから、一時的に北海道大学で保管するという暫定的な結論を出している[北海道大学文学部古河講堂「旧標本庫」人骨問題調査委員会（編）1997: 187-189]。「オタスの杜・風葬オロッコ」と書かれた貼りがされていた3体の頭骨は、1998年に北海道大学文学部で慰霊式が行われた後、北海道の浦臼町にある金剛寺に一時的に納骨されることとなった[北海道大学文学部古河講堂「旧標本庫」人骨問題調査委員会（編）2004: 4]。金剛寺を納骨先として紹介したのは、ウィルタ協会会長の田中了であった。金剛寺の米田弘明住職が、1990年8月以来サハリン残留邦人およびサハリン先住民族戦没者の慰霊のため、毎年サハリンに渡航していたことが理由である[北海道大学文学部古河講堂「旧標本庫」人骨問題調査委員会（編）2004: 4]。

しかし、2001年に田中了がポロナISKを何度も訪れて、現地のウィルタと相談を重ね、遺骨をサハリンに返還、埋葬する許可を取り付けた[北海道大学文学部古河講堂「旧標本庫」人骨問題調査委員会（編）2004: 9]。その後、国内外のウィルタや遺骨の受け入れ先の機関、ロシア政府などと調整を行い、人骨問題調査委員の2度のサハリンへの渡航、協議を経て、2003年8月に3体の遺骨がサハリンに返還された[北海道大学文学部古河講堂「旧標本庫」人骨問題調査委員会（編）2004: 9-49]。

ウィルタに返還された遺骨に関しては、北海道大学の人骨問題調査委員会が作成した報告書の記述に、ウィルタ協会から批判が行われたことを記しておく必要がある。最初の報告書では、人骨問題調査委員会は、①「オタスの杜」の頭骨が持ち出された可能性のある場所の列举、②3体の頭骨の鑑定結果、成分分析の結果から、持ち出された可能性のある場所を絞込むこと、③サハリンから頭骨が持ち出された場合の持ち出し経路の可能性の検討の3つを行っている[北海道大学文学部古河講堂「旧標本庫」人骨問題調査委員会（編）1997: 154-155]。その結果、頭骨が持ち出された明確な場所は分らないが、オタスまたはオタス周辺から持ち出された可能性は否定されないこと、これら3体の人骨の来歴を明らかにすることが、今の所は困難であることを結論として出している[北海道大学文学部古河講堂「旧標本庫」人骨問題調査委員会（編）1997: 181]。

この人骨問題調査委員会の結論に対して、ウィルタ協会の田中了は「問題の捉え方、報告書

の構成に著しい変化をみる」[田中 2004 (2001) : 61] と述べ、次のように批判した。「単なる解釈・見解のちがひ、といったたぐいのものではない。『報告書』作成上、不都合な部分は削除し、都合のよいものを摘出して論理を組み立てる方式、その姿勢そのものを問い直したい」[田中 2004 (2001) : 61]。田中 (2004 (2001)) が指摘する、北海道大学文学部古河講堂「旧標本庫」人骨問題調査委員会 (編) (1997) の問題点をまとめると、以下のようになる。①記述の根拠が不明な部分がある、②言及すべき先行研究に触れていない、③田中の人骨問題調査への貢献に触れていない、④記述に事実誤認が見られる、⑤真実の究明を目指さずに、答えの出ない問題を論じようとしており、論点をすり替えているように見受けられる [田中 2004 (2001) : 62-64]。

田中の批判を受けた人骨問題調査委員会は、北海道大学文学部古河講堂「旧標本庫」人骨問題調査委員会 (編) (2004) において、田中 (2004 (2001)) の批判に対する見解を発表した。①～③に関しては、おおむね田中の批判を受け入れ、訂正を行ったが、④や⑤の点に関しては反論を行っている [北海道大学文学部古河講堂「旧標本庫」人骨問題調査委員会 (編) 2004 : 53-59]。

しかし、北海道大学文学部古河講堂「旧標本庫」人骨問題調査委員会 (編) (2004) における修正は極めて不十分なものとされ、ウィルタ協会から再び厳しい批判を受けている [北海道大学大学院文学研究科・文学部古河講堂「旧標本庫」人骨問題調査特別委員会 (編) 2010 : 33]。田中は「『報告書Ⅱ』の第Ⅱ部は回りくどい釈明・弁明に満ちており、謝罪の言葉もなく、誤りを誤りとして素直に認めてもない」[北海道大学大学院文学研究科・文学部古河講堂「旧標本庫」人骨問題調査特別委員会 (編) 2010 : 33] と指摘した。この更なる批判を受け、北海道大学大学院文学研究科・文学部古河講堂「旧標本庫」人骨問題調査特別委員会 (編) (2010) は、20 世紀のウィルタについての歴史認識を示した上で、すでに出版した 2 冊の報告書の内容の再検討を改めて行っている [北海道大学大学院文学研究科・文学部古河講堂「旧標本庫」人骨問題調査特別委員会 (編) 2010 : 33]。

最後に、「日本男子 20 才」と書かれた貼り紙がされていた頭骨と、「寄贈頭骨出土地不明」と書かれた貼り紙がされていた頭骨についてみていく。この 2 つの頭骨については、詳細が分からず、返還先を見つけることは出来なかった。「日本男子 20 才」と書かれた貼り紙がされていた頭骨については、鑑定した結果、30 歳代の頭骨であるということが分かり、「寄贈頭骨出土地不明」と書かれた貼り紙がされていた頭骨については、コーカソイドのものであるということが分かっている [北海道大学文学部古河講堂「旧標本庫」人骨問題調査委員会 (編) 1997 : 189]。しかし、それ以上のことは分からず、この 2 体の頭骨はウィルタに返還された頭骨と共に 1998 年に慰霊式が行われた後、北海道大学文学部に保管されることとなった。

しかし、発見から 10 年以上経った後、2 体の頭骨が文学研究科長室に保管されてきたことを問題視する意見が人骨問題調査委員会から出され、埋葬先や方法の検討の後、2006 年に札幌市にある浄土真宗本願派大乘寺に、焼骨を行わずに納骨するという形で、仮安置されることとなった [北海道大学大学院文学研究科・文学部古河講堂「旧標本庫」人骨問題調査特別委員会 (編) 2010 : 1-3]。

3. 植民地主義と遺骨

これまでみてきた北海道大学文学部人骨事件の背景と経緯から指摘できる論点の一つは、北海道大学文学部人骨事件と植民地主義が非常に密接な関係にあるということである。研究機関が収集、保管してきた先住民の遺骨の問題と植民地主義との関連については、すでに多くの先行研究が指摘している。しかし、北海道大学文学部人骨事件は先住民だけでなく、韓国に対する植民地主義の問題も内包している出来事なのである。

先述したように、北海道大学文学部人骨事件で古河講堂内の一室から見つかった人間の頭骨6体のうち、返還先が特定されたものは、北方先住民のウィルタのもの3体と、韓国東学党のもの1体であった。北方先住民のウィルタに関しては、山崎春雄や児玉作左衛門をはじめとする、北海道大学医学部が行ってきた先住民遺骨の収集、保管との関連性が想起される。人骨問題調査委員会の調査では、誰がどこから持ち出したのか、特定することは出来なかったが、北海道大学医学部が北方先住民の遺骨の収集、保管と研究の拠点だったことと無関係ではない。

一方、韓国東学党の遺骨については、その多くが状況証拠や推論の積み重ねではあるものの、誰がどのような経路で持ち出したのかということの一応の回答を人骨問題調査委員会を出している。それによれば、韓国統監府勸業模範場の技手であった、佐藤政次郎が持ち出した可能性が最も高い。また、佐藤政次郎は札幌農学校校長の佐藤昌介と親交があり、同じく札幌農学校出身で教員でもあった新渡戸稲造とも韓国で面会した可能性があることから、韓国東学党の遺骨は、佐藤政次郎と札幌農学校との間にあったルートを通して持ち込まれたものと考えられる。

これら返還先が特定された遺骨のいずれについても、植民地主義が深く関わっている。ウィルタの遺骨については、人種主義や植民地主義の下で行われた人骨研究が関係していると考えられる。韓国東学党の遺骨については、日本の植民地であった韓国の統監府に勤めていた人物が盗骨に関わっている可能性が高い。また、それだけでなく、急進的な植民策の提唱者であった佐藤昌介や新渡戸稲造も関わっている可能性が指摘されている。これらのことから、北海道大学文学部人骨事件は、北海道帝国大学や形質人類学の植民地主義的側面があらわれた、象徴的な出来事であるといえるだろう。

北海道大学文学部人骨事件が示していることのもう一つは、植民地主義の負の側面に対する北海道大学の姿勢である。これはとりわけ、ウィルタに遺骨が返還されるまでの経緯によくあらわれている。上で述べたように、人骨問題調査委員会が出した最初の報告書、北海道大学文学部古河講堂「旧標本庫」人骨問題調査委員会（編）（1997）の内容に関して、事実誤認や先行研究検討の不徹底という不備があると、ウィルタ協会の田中了から抗議を受けている。田中が指摘した点のいくつかに対しては、北海道大学文学部古河講堂「旧標本庫」人骨問題調査委員会（編）（2004）で謝罪、訂正を行っているが、ウィルタ教会からは、その訂正についても不十分であると再び抗議されている。このことを受けて、北海道大学大学院文学研究科・文学部古河講堂「旧標本庫」人骨問題調査特別委員会（編）（2010）にて、北海道大学文学部古河講堂「旧標本庫」人骨問題調査委員会（編）（1997）と北海道大学文学部古河講堂「旧標本庫」人骨問題調査委員会（編）（2004）の再検討を行っている。

ウィルタ協会からの報告書への度重なる抗議を受けて、人骨問題調査委員会は、ウィルタ協会からの抗議が細かい修正の要求ではなく、日本がウィルタ民族にどう対応してきたかを問いかけている可能性を示唆した後、「2010年の今、謙虚に反省するならば、我々調査委員会のメンバーは、以前も今も、ウィルタ民族（原文ママ）や『オタスの杜』について知らないことが多すぎる。我々よりもはるかに長い取り組みの歴史をもつウィルタ協会からの批判に対して正面から向き合わなくてはならない」[北海道大学大学院文学研究科・文学部古河講堂「旧標本庫」人骨問題調査特別委員会（編）2010：33]と述べている。これは人骨問題調査委員会の正直な思いなのかもしれないが、人骨事件発生から15年が経ってもなお、ウィルタや「オタスの杜」に関して知らないことが多すぎると述べてしまうのは、調査委員会のあり方としても、長い歴史を持つ研究機関としてもいささか以上に問題のある態度のように思われる。

また、ウィルタの遺骨の返還に関しても、人骨問題調査委員会は1996年の時点で遺骨の返還には様々な困難があることから、一時的に北海道大学で保管することを結論として出していた。この北海道大学の対応について、田中（2004（2001））は、「だが難しさを挙げる前に努力しているかが問題である。私が知る限り努力していない」[田中 2004（2001）：64]と厳しい批判を行っている。実際、ウィルタの遺骨の仮安置先として金剛寺を紹介したのも、遺骨返還が実現する前からサハリンに何度も渡航して、現地のウィルタと遺骨の埋葬について相談を行っていたのも田中であつた。田中の貢献と比べると、北海道大学側は遺骨の返還に関して積極的な努力を怠っているといえるだろう。

ただし、遺骨返還問題に関しては、一つだけ注意しておかなければならない点がある。それは、遺骨返還問題は、国際的な先住民の人権意識が高まっていく中で焦点化されてきた問題の一つだということである。国際的な先住民運動が軌道に乗り始めるのは、1950年代以降のことである[スチュアート 2009：21]。それ以前は、先住民の権利というものは実態として存在していなかった。例えば、1926年に国際裁判でアメリカのカユガが、イギリス・アメリカ仲裁法で訴訟を起こしたが、その判決では、インディアンは国際法上の「ネーション（nation）」に該当せず、国内法が対応する従属的な「トライブ（tribe）」であるので、主権がないとされた[スチュアート 2009：22]。国際司法裁判所の判決においても、先住民の権利を巡る様々な訴訟は、ことごとく敗訴に終わっている[スチュアート 2009：22]。1950年代以前は、先住民に対する人権意識は高くはなかったのだ。

先住民を取り巻くこのような状況が変化したきっかけは、アメリカで先住民が第二次世界大戦に兵士として従軍したことである。米軍の兵士となった先住民は、軍の規律に基づいて平等に扱われ、権利を等しく享受することとなった。この軍隊での平等な生活が原動力となり、先住民の権利を確立させる機運が退役した先住民の間で高まっていくこととなったのである[スチュアート 2009：22]。1960年代末からは、アメリカで先住権や自治を促進する政策が実施されるようになり、アメリカで勢いづいた先住民運動は、カナダやオーストラリア、ニュージーランドへと広がっていき、やがては世界各国へと広がっていくこととなった[スチュアート 2004：5]。その後、1993年が国際先住民年、1994年～2004年が国際先住民の10年と定められている。

遺骨の返還も、1950年代以降の先住民の人権意識の高まりの中で、解決すべき問題として注目を集めていくようになっていったものである。より正確に言うなら、国際的に先住民の主権が認められたり、人権意識が高まっていく中で、研究機関が遺骨の返還という問題を見做すことができなくなっていったということである。先述したように、日本でも幕末の頃から、墓からの盗骨は犯罪とされており、研究者が墓から骨を盗み出すことも許されることではなかった。それにもかかわらず、研究者たちはアイヌやウイльтаなどの墓から、学術研究のためと称して骨を盗み出していったのである。このような学術研究に携わる者たちが持っていた、特権意識とも呼べるものは、国際的な人権意識が高まっていく中で、先住民やそれ以外の人々から批判にさらされるようになっていった。様々な人権が重要視されるようになった現在において、かつて研究者や研究機関が行ったことから目を背けるのは不可能である。研究機関、そして我々研究者は、今だからこそ、過去の植民地主義の負の遺産と向き合っていかなければならないのである。

北海道大学側は大学所蔵の遺骨が持つ、植民地主義の負の側面に対して積極的に向き合おうとしていない。それは、アイヌ納骨堂の多くのアイヌの遺骨もいまだに返還されていない（その気配すらない）事実からも分かることである。人権意識の高まった現代において、北海道大学には、植民地主義の負の遺産と真摯に向き合い、遺骨を返還していくことが求められている。

結論

本論では、1995年の北海道大学文学部人骨事件の背景と詳細を述べた上で、遺骨返還問題の争点について検討した。遺骨返還問題では、研究機関と植民地主義とが密接な関係にあったことが問題の争点とされている。植民地で人骨を採集し、それを測定して人種の違いや種族の類型、そして種族の優劣を特定、判断するという目的のもとで、当時の研究者はすでに違法であったにもかかわらず、人骨を盗み出した。盗み出された人骨は研究機関に集められ、研究のための資料とされた。つまり、植民地主義に基づいた人骨の収集、研究の拠点が、北海道大学をはじめとした研究機関であったのである。しかし、その後年月を経たことで、それらの人骨が植民地主義的な調査のために収集されたものだということが忘れられ、研究機関に放置されるままとなってしまった。そのような人骨が「発見」されたことによって起こったのが北海道大学文学部人骨事件である。つまり、先住民などから返還を求められている遺骨は、過去の植民地主義の負の遺産なのである。

また、その植民地主義の負の遺産であるところの遺骨返還問題に対して、研究機関（本稿では主に北海道大学）が真摯に向き合って対応していないことが問題としてあることも指摘した。1950年代以降の国際的な先住民の人権意識の高まりを背景として、日本においても、研究機関や研究者が遺骨の返還という問題に向き合わざるを得なくなっていった。当時であっても違法だった盗骨という行為に対して、適切な対応、すなわち然るべきところへの返還を行うことが、今だからこそ求められているといえる。しかし、文部科学省（2017）からも分かるように、研究機関にはいまだに多くの先住民の人骨が残されている。これは、過去の植民地主義の負の遺産である人骨の返還という問題に、研究機関がきちんと向き合っていないことを示しているの

である。

研究機関にいまに残された多くの遺骨に対して、どのような対処を行うべきなのか、何処に（もしくは誰に）返還するべきなのか、返還先が分からない場合、どうすべきなのか、といった問題は、今後も研究機関や研究者に対して問いかけていくものである。研究機関や学術研究と植民地主義との関係という過去に向き合った上で、それらの問題に対して取り組んでいくことが、研究機関や我々研究者に対して求められていると考えられる。

参考文献

市川利美・平田剛士

- 2016 「過ちに真摯に向きあえない北海道大学——『北海道大学医学部アイヌ人骨収蔵経緯に関する調査報告書』から見えてくるもの——」『アイヌの遺骨はコタンの土へ——北大に対する遺骨返還請求と先住権——』北大開示文書研究会（編）、pp.166-187、緑風出版。

植木哲也

- 2017 『新版 学問の暴力——アイヌ墓地はなぜあばかれたか——』春風社。
2019 「アイヌ遺骨返還運動とDNA研究」『大学による盗骨——研究利用され続ける琉球人・アイヌ遺骨——』松島泰勝・木村朗（編）、pp.92-114、耕文社。

榎澤幸広・弦巻宏史

- 2012 「ウィルタとは何か？——弦巻宏史先生の講演記録から 彼らの憲法観を考えるために——」『名古屋学院大学論集 社会科学篇』48(3)：79-118、名古屋学院大学総合研究所。

小田博志

- 2018 「骨から人へ——あるアイヌ遺骨の repatriation と再人間化——」『北方人文研究』11：73-94。

加藤博文

- 2018 「先住民族の遺骨返還——先住民考古学としての海外の取り組み——」『先住民考古学シリーズ』1：1-71、北海道大学アイヌ・先住民研究センター 先住民考古学研究室。

国立大学法人北海道大学

- 2013 『北海道大学医学部アイヌ人骨収蔵経緯に関する調査報告書』国立大学法人北海道大学。

スチュアート ヘンリ

- 2004 「先住民の10年をふりかえって——協調と紛争——」『文化人類学研究』5：2-13、早稲田大学文化人類学会。
2009 「先住民の歴史と現状」『先住民』とはだれか 窪田幸子・野林厚志（編）、pp.16-37、世界思想社。

田中了

- 2004（2001）「ウィルタの三体の頭骨をめぐって——北大・人骨問題『報告書』に対する反論——」『古河講堂「旧標本庫」人骨問題 報告書Ⅱ』北海道大学文学部古河講堂「旧標本庫」人骨問題調査委員会（編）、pp.61-64、北海道大学大学院文学研究科・文学部。

田中了・ゲンダース、D

- 1978 『ゲンダース——ある北方少数民族のドラマ——』現代史出版会。

土橋芳美

- 2017 『痛みのベンリウク——囚われのアイヌ人骨——』草風館。

中川裕

- 2018 「ことば」『増補・改訂 アイヌ文化の基礎知識』アイヌ民族博物館・児島恭子（監修）、pp.11-30、草風館。

北大開示文書研究会（編）

2016 『アイヌの遺骨はコタンの土へ——北大に対する遺骨返還請求と先住権——』 緑風出版。
星新一

1974 『祖父・小金井良精の記』 河出書房新社。

北海道大学大学院文学研究科・文学部古河講堂「旧標本庫」人骨問題調査特別委員会（編）

2010 『古河講堂「旧標本庫」人骨問題 報告書Ⅲ』 北海道大学大学院文学研究科・文学部。

北海道大学文学部古河講堂「旧標本庫」人骨問題調査委員会（編）

1997 『古河講堂「旧標本庫」人骨問題 報告書』 北海道大学大学院文学研究科・文学部。

2004 『古河講堂「旧標本庫」人骨問題 報告書Ⅱ』 北海道大学大学院文学研究科・文学部。

松島泰勝・木村朗（編）

2019 『大学による盗骨——研究利用され続ける琉球人・アイヌ遺骨——』 耕文社。

文部科学省

2017 「大学等におけるアイヌの人々の遺骨の保管状況の再調査結果」 文部科学省。

